



深淵への帰行

真継伸彦

188532

# 深淵への帰行

真継伸彦

真継伸彦（まつぎ のぶひこ）

1932年京都に生れる。

京都大学文学部ドイツ文学科卒業。

＜著書＞ 小説「鮫」「光る聲」「無明」など、評論集に  
「未来喪失者の行動」「内面の自由」「青春の遺書」「新しい  
宗教を求めて」などがある。

## 深淵への帰行

昭和五十年九月二十五日第一刷発行

著者 真継伸彦

発行者 井上達三

発行所 株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八

電話 二九一七六五一

郵便番号 一〇一七六五一

振替東京 六一四二二三

印刷 曙印刷

製本 和田製本

©真継伸彦一九五五

001-1011-1001

# 深淵への帰行

装帧  
田村義也

目

次

## I

深淵への帰行——キム・ジハ氏との出会い

金芝河氏らを助けるために——ハンストに入るまで

死の彼岸からの光

天国と地獄

「ヨーロッパ紀行」が教えてくれたもの

とるもとりあえず——「季刊 三千里」創刊に寄せて

人の魂はぬれ雑巾ではない

## II

まず自分の底を掘れ、そこに泉がある

非暴力主義への意志

とても地獄は一定すみかぞかし——親鸞と私

末法無戒の世

大学の知的權威確立を

全共闘運動とその後にやってきたもの

四無大学をどうするか

大学革命にみる迫害と墮落

人間として叫びつづける市民たち——「加害・被害」の相對關係を  
打破する道を求めて

王宮前広場の農民集会

タイのウーマン・リブ

### III

権力とエゴイズム——小西反軍裁判における浜証言をめぐる

美しい勝利

主文 被告人は無罪



**I**



## 深淵への帰行——キム・ジハ氏との出会い

離陸してまもなく、右手の窓ぎわに坐っている私のならびの席へ、大きな写真機を手にした男がやってきた。色は浅黒く、瀟洒な麻の背広を着た、日本人か韓国人か見分けのつかぬ中年の男である。夏空でも撮るのだろうか？ 機内はほぼ満員であって、となりが二つとも空いている私のシートからはたしかに撮りやすい。私は左の席に置いたアタッシュケースを膝の上に置き、そばへくるようすすめた。

「いや、いいです」

男は笑顔で言い、撮りおえると、

「商用ですか？」

と問いかけた。

「いえ、観光旅行といったところで……」

言葉を濁しながら答えたとき、はじめて警戒心が走り、彼が撮ったのはありふれた夏空ではなくて、私の顔だったのかもしれないと思いあたった。

すぐ前に鶴見俊輔氏が坐っている。じっと前をむいている頭だけがみえる。鶴見氏は撮されな

った。男が韓国情報部関係の者であるとしても、私たちが仲間であることに気づいていないのかもしれなかった。

六月二十九日の午ちかくのことである。私たちは馬山<sup>マサン</sup>の国立結核療養所に軟禁されている詩人、キム・ジハ氏（本名は金英一、青木書店刊「キム・ジハ詩集」の訳者姜舜氏によれば、上のペンネームは金芝河とも金芝夏とも訳されていて、統一していないので片仮名で書くことにする。私たちがキム・ジハ氏と会ったとき、このような些事を照会する余裕はともなかった）の釈放運動を主目的に結成された、「訪韓市民連合」の代表となって羽田を発っていた。国内で約千名、国外からもJ・P・サルトル、S・ボーボワール、A・ロブグリエ、M・デュラス、N・チョムスキー、H・マルクーゼなど十数名の知識人が寄せた釈放要求の署名簿をたずさえて、直接韓国をおとずれるメンバーの選定はしばらく動揺したが、最後に鶴見氏と私のほか、小田実、金井和子、中井稔栄の五人にきまった。金井氏はべ平連運動に発足当初から参加している東京教育大学の大学院生であり、中井氏はキム・ジハ詩集『長い暗闇の彼方に』を出版した中央公論社員である。鶴見氏は関西でビザを申請し、あとの四人は東京で、さる旅行社を通じていっしょに申請した。いずれも観光を目的としたビザであるが、小田、中井の二人は交付を拒否された。「訪韓市民連合」はあらかじめ記者会見を行って意図を公表していたので、韓国政府にとっては、内政干渉とも判断されうるその意図を、当局は知っていた。小田、中井の二人は韓国での行動の予定をくわしく訊ねられて、目的が観光ではないことを理由に拒否された。

前日の夕方、小田は上京してきた鶴見氏に、

「おれが拒否されたのは、おれの反権力運動が、韓国にまで鳴りひびいていることだよ。あなたが許可されたのは、あなたの反権力運動がぜんぜん評価されていないことだよ。あなたはこれまで何をしてきたのかね」

と言った。冗談はさておき、単独で申請した鶴見氏は、当局からマークされていない可能性があった。いっぽう、小田、中井という要人、人物といっしょに申請した私のほうは、許可こそ下りたが、行動を監視される可能性が濃かった。

署名簿を私があずかったのは失敗だったかもしれない。写真を撮られたあとで、私ははじめてかえりみた。昨夜は有志があつまって、眼にみえぬ強力な組織のさまざまな出方を想定しつつ、遅くまで行動計画を練った。私たちの主要な行動目的は二つあった。ひとつは馬山の国立結核療養所をおとずれてキム・ジハ氏と会うことであり、ひとつは韓国総理府をおとずれて政府の要人に会い、署名簿を手渡して、言論の自由を要求する強い世論の实在を証明しながら、政府批判のかどで逮捕され、軟禁されている詩人の釈放を要求することである。

J・P・サルトルをはじめとする、大勢の国外の知識人の書簡が添えられているその署名簿を、だれが持参するかという問題もむろん討議した。知識人としても反戦主義者としても、はるかに著名な鶴見氏のほうが、荷物を点検され、没収されるおそれが濃いということに意見が一致して、私が持参することになった。それも、手荷物のほうがくわしく点検されるというので、紙袋に入れて密封した署名簿を、航空会社にあずけるポストンバッグに入れた。飛行機は午前十一時発の大韓航空である。一時間前には日本航空の便があったが、ビザの申請などに手間どったために乗れなかつ

た。

このような配慮は、観光ビザを申請したことをもふくめて、韓国政府の要人に会うまでに無用な摩擦を避けるためである。私たちはキム・ジハ氏の釈放運動を行う以上は、効果のある運動でなければならぬと考えた。そのためには権力機構ないし官僚機構の最上部にいて、決定権を有する人物に会って誠意を披瀝する必要があると考えた。ありきたりの要求であれば、わざわざ韓国へゆくまでもなく、在日大使館をおとずれて要求書を手渡せばすむ。しかしそれでは効果がとばしいと判断したのである。観光ビザを申請して観光しなかったという違反行為も、要人に会って真意を伝えれば是認されるものと予想していた。

その真意の一部であるが、私たちはキム・ジハ氏を救出するといった、救済主義的な発想をもちあわせていなかった。キム・ジハ氏の釈放運動は何よりもまず、私たち自身の言論の自由を守るための運動である。国内でも国外でも、言論弾圧事件が生じれば、私たちは私たち自身の自由のために、つねに抗議運動を起し、あるいは参加して、必要とあればどこへでもでかけるつもりでいた。

これが基本的な態度である。しかし個人の力にはもとより限界がある。抗議運動の必要が無数にあるとすれば、どの運動により積極的に参加するかという選択の問題は、多分に個人的な事情に左右されてくる。今度の場合も、朝鮮語はおろか英語もろくに話せぬ私が、不適格な任務をひきうけた動機には、キム・ジハ氏に傾倒している中井稔栄氏と小田実が友人であり、小田と私が友人であるという個人的な事情があった。

身近な者があつまって運動体を作ったのだが、私はこの種の非政治的な運動の場合、それが自然

で、また望ましい成立の仕方であると思っている。この種の運動に、理論の厳密な一致は何ら必要ではない。おたがいの思想にさまざまな異同があっても、言論の自由を守るという大前提で一致しておればよい。そのうえで、行動目標をキム・ジハ氏の釈放運動ひとつにしれば、必要なのはするかしないかという意志の統一である。統一行動のために必要なのは、理屈よりも相互の信頼である。鶴見氏と私と、翌日の日本航空便でくる予定の金井和子氏との三人は、個人的な人間関係の連鎖が、偶然に作りだした人間の輪だった。私は鶴見氏と二度ばかり長時間話しあったことがあるが、金井氏とは昨夜の会合が初対面だった。しかし、無条件で信頼しあっている友人が紹介する友人は、まず無条件で信頼できるものである。

「愉快な顔ぶれになったんですねえ」

昨夕会ったとき、小柄な鶴見俊輔氏は、私をみあげて大笑いした。氏の心中はどうだったか、私は今度の旅行が、あまり愉快なものになりそうもないと思った。小田実に参加をもとめられて、ごく気軽にひきうけたあと、私は知りあいの在日朝鮮人に電話をかけ、アドヴァイスをもとめた。

「けっして一人歩きしてはいけませんよ」と相手はきびしい口調で言った。「いつも連れだって行動し、遠出をしてはいけません。韓国ではどこにでも三十二万の情報部員の眼が光っているほか、白骨団という団体がありますよ。釈放される政治犯を、監獄のそとで待ちかまえて私刑をくわえたりする連中です。無罪放免された容疑者でも半殺しの目にあわせますよ。たいていは北鮮から流れてきた連中で、そんなことをして政府にたえず忠誠を示さなければ、生きてゆけないのです。夜はホテルから一歩もでないようにして、酒もホテルのバーで飲むのです。ふつうの商社マンみたいに、

妓生と遊んだりしてはいけません。あなたの方の場合は、ちょっとした私行の乱れが、批判や暴行や強制送還の口実になりかねませんからね。……まあ、あなた方は韓国政府としては優遇しなければならぬ日本人だから、危険なことではないと思いますがね、用心されるに越したことはないのです」

臨戦体制下の、「五賊」や「蜚語」という権力批判の詩の作者が逮捕され、掲載誌は発禁や廃刊に追いやられる、精神が硬く緊張した国をおとずれるのである。たしかに用心するに越したことはないが、私などありきたりの日本人とは比較にならぬ、惨澹たる苦勞を嘗めつづけているその友の、さりげない言葉を聞いていると、心にはいつものように深淵がひらき、底にひそんでいる冷たく動かぬものが顔をのぞかせようとした。

昭和四十一年の夏、私はさる雑誌の依頼で広島へゆき、原爆問題を取材したことがある。そのときひとりの被爆者は、原爆投下の直後に、川に浮く無数の屍を鳶口で岸边にひき寄せ、金歯を探しだしてはペンチでひき抜いていた在日朝鮮人の話をしてくれた。私が朝鮮人問題を問うとき、心の奥から浮かびでようとするのはつねにこの、ケロイドにひきつる黒焦げの、ふくれあがった屍をひとつひとつ岸边にひき寄せて、開いた口をのぞきこんでいる人間の顔である。黙々と作業に従事しているその顔は、ありふれた声をかけたところでけっして振りあおぐうとしない。たとえば、日本人は人類史上最初の、おそるべきジェノサイドの被害者である。日本人はその惨状を全世界に知らせ、おなじ惨禍を人間が二度と浴びぬよう働きかける責務があると言ったところで、その顔はふりむいて耳をかたむけようとせず、黙々と自分の仕事に従事するばかりなのだ。

彼はおそらく植民地時代の祖国で貧困にあえいでいたときに、日本へゆけば道に金が落ちている